

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

【生産量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

生産量は、ウクライナで通貨安に伴う資材コストの上昇による単収低下及び晩夏の高湿・乾燥から減少、ブラジル等でも減少するものの、米国、EUで増加が見込まれることから、世界全体では前年度を上回り、史上最高の990.7百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、EU、米国、で上方修正、ウクライナで下方修正された。

【消費量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

消費量は、EUで減少するものの、中国、米国等で飼料用需要の増加が見込まれることから、世界全体では前年度を上回り、史上最高の973.1百万トンとなる見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、米国で上方修正、日本、インドで下方修正された。

【貿易量】 2014/15年度 前年度比 ↓ 前月比 ↓

世界全体の貿易量は、前年度より減少し、114.1百万トンとなる見込み。

国別には、輸出国では、パラグアイで増加し、米国、ウクライナ等で減少する見込み。輸入国では、日本、メキシコで増加し、EU、エジプト等で減少する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で下方修正され、輸出国では、ロシアで下方修正、輸入国では、エジプト、イランで上方修正、EU、日本で下方修正された。

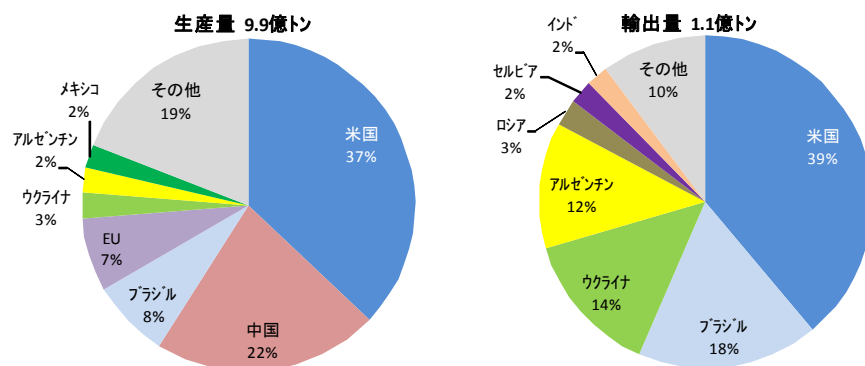
【期末在庫量】 2014/15年度 前年度比 ↑ 前月比 ↑

期末在庫量は、前年度より増加し、世界全体では190.6百万トンとなる見込み。

国別には、ブラジル、南アフリカ等で在庫が取り崩されるものの、米国等で積み増しされる見込み。期末在庫率は19.6%と、前年度より上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、世界全体で上方修正され、国別には、米国で上方修正、EUで下方修正、中国でわずかに下方修正された。

図－1 世界のとうもろこしのシェア（2014/15年度）



表－1 世界のとうもろこし需給（米国農務省）

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	868.6	988.6	990.7	3.2	0.2
米 国	273.8	353.7	367.7	2.0	3.9
中 国	205.6	218.5	217.0	-	▲ 0.7
ブラジル	81.5	79.3	75.0	-	▲ 5.4
EU	58.9	64.2	71.0	2.7	10.6
ウクライナ	20.9	30.9	25.0	▲ 1.0	▲ 19.1
アルゼンチン	27.0	25.0	23.0	-	▲ 8.0
インド	22.3	24.2	21.0	-	▲ 13.2
消 費 量	865.4	953.2	973.1	2.4	2.1
うち飼料用	519.4	575.8	596.2	2.2	3.5
米 国	263.6	295.4	302.4	1.3	2.4
中 国	200.0	212.0	220.0	-	3.8
EU	69.6	76.0	75.5	-	▲ 0.7
ブラジル	52.5	55.0	56.5	-	2.7
メキシコ	27.0	31.5	32.8	-	4.0
インド	17.5	19.5	19.5	▲ 0.1	0.0
日本	14.5	15.2	15.5	▲ 0.2	2.0
貿 易 量	95.2	129.0	114.1	▲ 1.1	▲ 11.6
(輸出)					
米 国	18.6	48.7	44.5	-	▲ 8.7
ブラジル	25.0	21.5	20.0	-	▲ 7.0
アルゼンチン	18.7	15.0	14.0	-	▲ 6.7
ウクライナ	12.7	20.0	16.0	-	▲ 20.0
インド	4.7	3.9	2.5	-	▲ 35.9
ロシア	1.9	4.1	3.0	▲ 0.5	▲ 26.8
パラグアイ	2.8	1.8	2.3	-	27.8
(輸入)					
日本	14.4	15.2	15.5	▲ 0.2	2.0
EU	11.4	16.0	7.0	▲ 3.0	▲ 56.3
メキシコ	5.7	10.7	10.9	-	1.9
韓国	8.2	10.3	9.5	-	▲ 7.8
エジプト	5.1	8.5	7.5	1.0	▲ 11.8
イラン	3.7	5.5	5.3	0.5	▲ 3.6
台湾	4.2	4.4	4.2	-	▲ 4.5
期末在庫量	137.7	173.0	190.6	0.7	10.2
中国	67.6	77.4	77.3	▲ 0.0	▲ 0.1
米国	20.9	31.4	52.9	2.0	68.4
ブラジル	14.2	17.8	17.1	-	▲ 3.9
EU	5.1	6.9	6.9	▲ 0.5	0.3
南アフリカ	3.1	3.3	2.9	-	▲ 14.4
アルゼンチン	1.3	2.8	2.6	-	▲ 6.7
期末在庫率	15.9%	18.1%	19.6%	0.0	1.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「PS&D」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 October 2014)

(2) とうもろこしの主要生産・輸出国等の需給状況

ア 米国

【需給状況】

<米国農務省の見通し>

生産量は、収穫面積が減少するものの、好天に恵まれ単収が上昇することから、史上最高の367.7百万トンとなる見込み。

消費量は、エタノール用需要が減少するものの、飼料用需要が増加することから、前年度より増加し、302.4百万トンとなる見込み。

輸出量は、大幅に増加した前年度に比べ減少し、44.5百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、0.6百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、52.9百万トンと前年度より大幅に増加(+68.4%)し、期末在庫率も15.2%と、前年度より上昇する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の期末在庫量で上方修正、消費量、輸出量で下方修正、2014/15年度の生産量、消費量で上方修正、輸入量で下方修正された。結果として、期末在庫量が上方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

米国コーンベルトでは、例年、とうもろこしの作付けは4月中旬から5月中旬にかけて行われる。2014年2月以降、厳しい寒さが続いたコーンベルトの北部では凍結した土壌の溶解に時間を要し、作付作業に遅れが生じたが、5月初旬以降気温が上昇したことにより、作付作業の遅れを一気に取り戻した。6月下旬、北部産地では多雨により作柄の悪化が懸念されたが、その後は総じて理想的な天候が続き、作柄は極めて良好となり、大豊作が確定的とみられている。

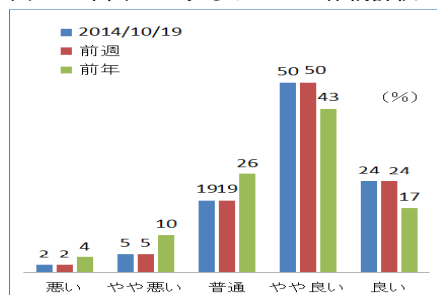
米国農務省(USDA)「Crop Progress」(2014. 10. 20)によれば、10月19日現在、主要18州の収穫進捗率は31%と、10月初旬からの降雨により収穫作業が遅れ、平年同期(38%)、前年同期(53%)を下回っている。作柄評価は、良い/やや良いが74%と前年同期の60%を大きく上回り、高い水準を維持している。

図2：米国のとうもろこしの収穫の進捗



資料：USDA「Crop Progress」(2014. 10. 20)をもとに農林水産省で作成

図3：米国のとうもろこしの作柄評価



我が国の輸入先国シェア	1位 (2013年数量ベース)	44.8%
世界の生産量シェア	1位 (2014/15年度)	37.1%
輸出量シェア	1位 (2014/15年度)	39.0%

表－2 米国のとうもろこし需給(市場年度：9月～翌年8月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	273.8	353.7	367.7	2.0	3.9
消費量	263.6	295.4	302.4	1.3	2.4
うち飼料用	110.2	130.2	136.5	1.3	4.9
エタノール用等	117.9	130.3	130.2	-	▲ 0.1
輸出量	18.6	48.7	44.5	-	▲ 8.7
輸入量	4.1	0.9	0.6	▲ 0.1	▲ 29.7
期末在庫量	20.9	31.4	52.9	2.0	68.4
期末在庫率	7.4%	9.1%	15.2%	0.5	6.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	35.36	35.48	33.63	▲ 0.30	▲ 5.2
単収(t/ha)	7.74	9.97	10.93	0.15	9.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 October 2014)

写真－1 ミシガン州 (2014年9月中旬撮影)
－作柄は全体的に良好－



【バイオエタノール】

米国におけるとうもろこしのエタノール向け需要は、RFS（再生可能燃料基準）によるバイオ燃料の義務付け使用量の増加等の要因で、とうもろこし需要の約4割を占めるまで増加してきた。しかし、2012/13年度は、とうもろこし価格の高騰により需要が減少した。2013/14年度はとうもろこしの豊作により価格が下落したため、需要が拡大したものの、その後は、米国のガソリン需要の低迷に伴い、エタノール向け需要も横ばいで推移している（図－4）。

エタノールの生産量は、2012年6月に入り、とうもろこしの価格高騰を受け減少し始め、90万バレル超だった週間生産量が、7月以降は80万バレル前後の水準で推移した。2013年4月に入り、原料価格の下落及び粗利益の回復を受け増加、概ね85万バレル前後で推移していたが、2013/14年度における米国産とうもろこしの大豊作が確定的となった9月後半以降急激に回復し、現在は90万バレル前後で推移している（図－5）。

2013年11月15日、米国環境保護局（EPA）は2014年の再生可能燃料の使用義務について181.5億ガロンから152.1億ガロンへの引下げを提案した。とうもろこし由来のエタノール使用義務量は144億ガロンから130億ガロンに引き下げられると見られている。なお、最終的な使用義務の決定時期は未だ不透明な状況。

2014年6月6日、EPAは燃料油の精製業者に対し、2013年バイオ燃料使用義務遵守についての報告期限を、当初予定の6月末から9月末に延期した。精製業者は割当てられた義務数量以上のバイオ燃料を使用した場合、その超過分をRIN（再生可能燃料識別番号）の形で次年度の義務数量の20%まで繰り越すことが出来るが、2014年使用義務数量が未だ確定していない中、精製業者の次年度へのRINの繰越数量が決められない状況となっている。

【貿易情報】

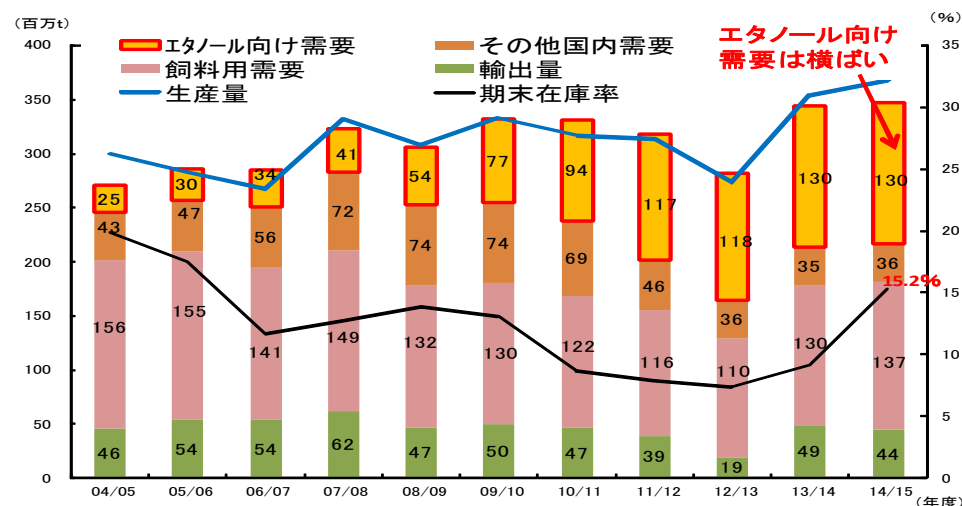
2013年11月18日、中国は、未承認のGM種子であるMIR162が検出されたため、2013年11月から米国産とうもろこしの受入を拒否している。11月からの受入拒否数量は百万トンを超えている。

2014年7月24日、米国穀物協会は、中国国家品質監督検査検疫総局（AQSIQ）が米国産DDGSの輸入に際し、MIR162の混入が無いとする証明書の添付を義務化したと伝えた。当初、同証明書の添付義務は7月24日以降の船積を対象としていたが、8月18日以降へと延期された。報道（2014.8.21）によれば、AQSIQは、米国産DDGSに続きソルガムの輸入に対しても検疫の強化に動いている模様。

報道（2014.9.17）によれば、本問題に関し、2014年9月上旬に行われた米中検疫当局間の検査方法を巡る交渉は、合意に至らなかった模様。

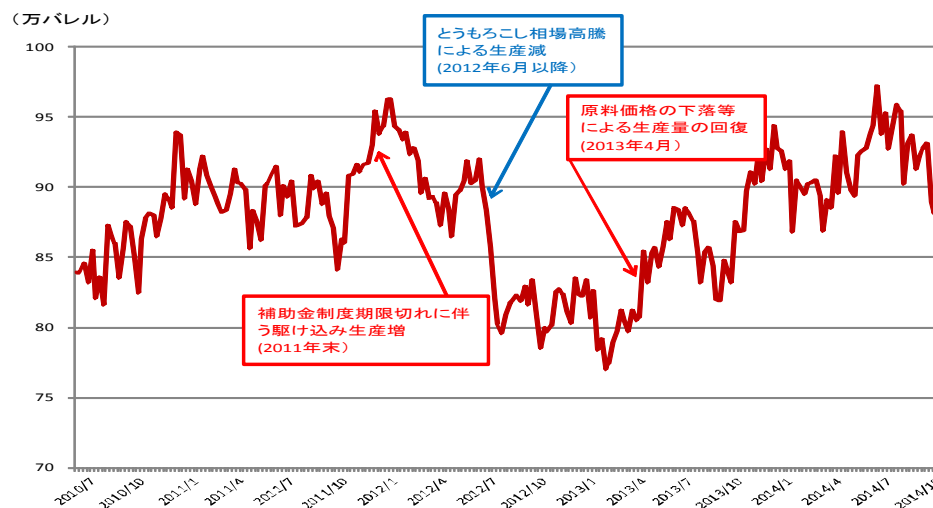
※DDGS：とうもろこしを原料にエタノールを生産する際の副産物。家畜飼料として利用される。

図－4 米国とうもろこし需給の推移
－2014/15年度の生産量は増加、期末在庫率も大幅に上昇－



資料：USDA「PS&D」（2014.10）等をもとに農林水産省で作成

図－5 米国におけるバイオエタノールの生産量（週当たり）の推移



資料：米国エネルギー情報局(EIA)資料（2014.10）をもとに農林水産省で作成

イ 中国

【需給状況】（詳細は右表を参照）

＜米国農務省の見通し＞

生産量は、収穫面積は増加するものの、華北平原及び東北部で夏の干ばつにより単収が低下することから前年度より減少し、217.0百万トンとなる見込み。

消費量は、飼料用需要が堅調なこと等から前年度より増加し、220.0百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、3.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も35.1%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の輸出量、輸入量、期末在庫量で下方修正された。結果として、2014/15年度の期末在庫量がわずかに下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の生産量は、217.0百万トンと前年度(218.5百万トン)より1.5百万トン減少する見込み。これは、2014年7～8月、東北部及び華北平原において過去数十年で最悪と言われる干ばつが発生したため。その後、8月下旬から9月初旬にかけて、降雨量が平年並みに回復したことから、作柄悪化に歯止めが掛かったが、先の干ばつの埋め合わせをするには至らなかった。一方、黒竜江省、中国中央部及び南部では、総じて生育に適した天候に恵まれた。現在、主要産地の大部分で収穫作業が終了に近づいている。

収穫面積は、36.80百万ヘクタールと前年度(36.32百万ヘクタール)より増加する見込み。近年、中国では収益性の低い大豆からとうもろこしに作付けをシフトする動きがあり、とうもろこしの作付面積は年々増加傾向にある。

【貿易情報】

中国通関(海関)統計によれば、2014年9月の輸入量は、前年同月比1,231.7%増の2.0万トンとなった。国別には、米国が1.6万トン(シェア78.5%)、ウクライナが0.1万トン(同7.8%)。また、2014年1～9月の累計輸入量は、前年同期比0.7%増の161.7万トンとなった。国別には、米国が97.5万トン(シェア60.3%)と前年同期(151.0万トン)から35.4%減少する一方で、ウクライナが41.1万トン(同25.4%)と前年同期(82.6トン)から急増した。なお、米国からの輸入量の減少は、米国産とうもろこしの未承認のGM種子の混入による受入拒否によるもの。

【その他】

中央一号文件(2014.1.19)に基づき、とうもろこし、なたね、砂糖の臨時買上げ・備蓄政策が実施されている。

報道(2014.10.22)によれば、中国政府は2014/15年度もとうもろこしの国家備蓄を大量に積み増す可能性が高く、積み増しの数量は40百万トン前後になると伝えた。国家備蓄の積み増しはこれで3年連続となり、備蓄数量は100万トンに達する見通し。

(世界の生産量シェア 2位(2014/15年度 21.9%))

表－3 中国のとうもろこし需給(市場年度：10月～翌年9月)

(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	205.6	218.5	217.0 (215.0)	-	▲ 0.7
消 費 量	200.0	212.0	220.0 (214.6)	-	3.8
うち飼料用	144.0	154.0	160.0 (145.0)	-	3.9
輸 出 量	0.1	0.0	0.1 (0.2)	-	233.3
輸 入 量	2.7	3.4	3.0 (3.0)	-	▲ 11.8
期末在庫量	67.6	77.4	77.3 (85.3)	▲ 0.0	▲ 0.1
期末在庫率	33.8%	36.5%	35.1% (39.7%)	▲ 0.0	▲ 1.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	35.03	36.32	36.80 (36.70)	-	1.3
単収(t/ha)	5.87	6.02	5.90 (5.86)	-	▲ 2.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 October 2014)
IGC「Grain Market Report」(25 September 2014)

写真－2 遼寧省 ー水分不足により粒が縮んでいるー
(2014年10月3日撮影)



写真提供：アイ・シー・ネット(株)

ウ アルゼンチン

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、単収、収穫面積共に減少することから前年度より減少し、23.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より増加し、9.2百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、14.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も11.4%に低下する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

【生育進捗状況及び作柄】

ブエノスアイレス穀物取引所週報(2014. 10. 23)によれば、2014/15年度の作付作業は2014年9月から開始され、土壌水分量が十分であることから作付作業は順調に進んでいる。10月23日現在の作付進捗率は32.8%と、前週(30.0%)から2.8%進捗し、前年同期(26.8%)より6.0%上回っている。

2014/15年度の収穫面積は、3.0百万ヘクタールと前年度(3.6百万ヘクタール)より16.0%減少する見込み。とうもろこしの国際価格の下落や、物価上昇に伴う土地の賃借相場の高騰などが、農家の作付意欲を削いでいるため。

【貿易情報】

アルゼンチン農牧漁業省農畜食糧衛生品質管理センター(SENASA)によれば、2014年1～8月のとうもろこし輸出量は1,008万トン。国別には、アルジェリア(216万トン)が最も多く、次いでエジプト(109万トン)、マレーシア(97万トン)となっている。

【その他】

報道(2014. 9. 18)によれば、2014年9月18日、アルゼンチンの下院で「供給法」の改正案が可決された。同法案は既に上院で可決されており、大統領の署名を経て立法化される見通し。「供給法」とは、物価統制の目的で、政府が大手企業の販売価格や供給量に介入する事を認めるほか、政府が企業の利幅や販売価格の上下限まで決定することを可能にする法律。穀物業界では、インフレヘッジのため農家や穀物商の抱えているとうもろこしや小麦などの穀物在庫を、政府が強制的に接收、流通させるような事態も起こりかねないとして、立法化に対する懸念が広がっている。

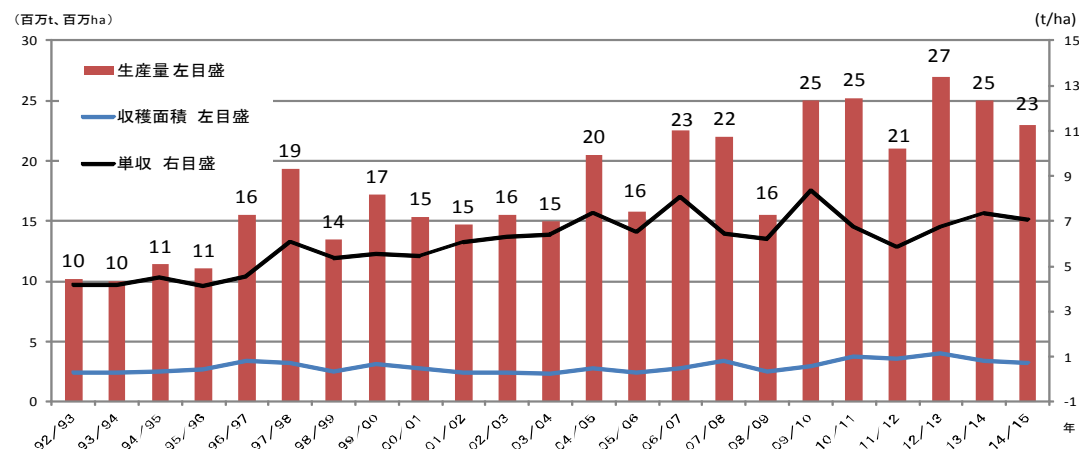
我が国の輸入先国シェア 3位 (2013年数量ベース13.3%)
世界の生産量シェア 6位 (2014/15年度 2.3%)
世界の輸出量シェア 4位 (2014/15年度 12.3%)

表－4 アルゼンチンのとうもろこし需給
(市場年度：翌年3月～翌々年2月)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.0	25.0	23.0 (23.0)	-	▲ 8.0	
消 費 量	7.9	8.5	9.2 (8.8)	-	8.2	
うち飼料用	5.3	5.6	6.1 (6.0)	-	8.9	
輸 出 量	18.7	15.0	14.0 (15.5)	-	▲ 6.7	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	0.0	
期末在庫量	1.3	2.8	2.6 (1.3)	-	▲ 6.7	
期末在庫率	5.0%	12.0%	11.4% (5.3%)	-	▲ 0.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	4.00	3.40	3.25 (3.70)	-	▲ 4.4	
単収(t/ha)	6.75	7.35	7.08 (6.22)	-	▲ 3.7	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」
「World Agricultural Production」(10 October 2014)
IGC「Grain Market Report」(25 September 2014)

図－6 アルゼンチン産とうもろこしの生産量、収穫面積、単収の推移



資料：USDA「PS&D」(2014. 10) 等をもとに農林水産省で作成

【需給状況】（詳細は右表を参照）

生産量は、前年度より減少し、75.0百万トンとなる見込み。
消費量は、飼料需要増から前年度より増加し、56.5百万トンとなる見込み。
輸出量は、前年度より減少し、20.0百万トンとなる見込み。
期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も22.3%に低下する見込み。
なお、前月からの予測の改訂は行われていない。

ブラジル南部を中心に作付けされる夏とうもろこしは、例年9月から12月にかけて作付けが行われる。ブラジル食料供給公社(CONAB)の10月報告(2014. 10. 9)によれば、ゴイアス州北部及び南部、サンパウロ州等で降雨量が不足しており(図-8)、生育への悪影響が懸念されている。

同報告によれば、2014/15年度の作付面積は、とうもろこし価格の低迷により収益性の高い大豆に作付けがシフトする傾向にあることから、15.3百万ヘクタールと前年度(15.8百万ヘクタール)を下回る見込み。生産量も、77.8百万トンと前年度(79.9百万トン)を2.7%下回る見込み。

2013年6月10日、中国政府はブラジル産GM大豆3種の輸入を認可している。さらに、2014年8月21日、ブラジル農務省(2014.9.22)によれば、中国政府はブラジル産GM大豆3種及びGMとうもろこし5種の輸入を新たに認可した模様。

2014/15年度	2014年												2015年										
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1	2	3	4	5	6	7	8			
夏とうもろこし	南部 パラナ州等						作付け 6.12 (百万ha)								収穫 28.4 (百万t)						生産量 夏冬計 77.8		
冬とうもろこし	作付面積夏冬計 15.30												作付け 9.18				収穫 49.4						
大豆	中西部 マトグロソ州等						作付け 31.22								大豆収穫後冬とうもろこし作付け 90.6								

資料：ブラジル食料供給公社(CONAB)2014年10月報告をもとに農林水産省で作成。
注：カレンダーの帯の中の数量はブラジル全体の作付面積及び生産量。

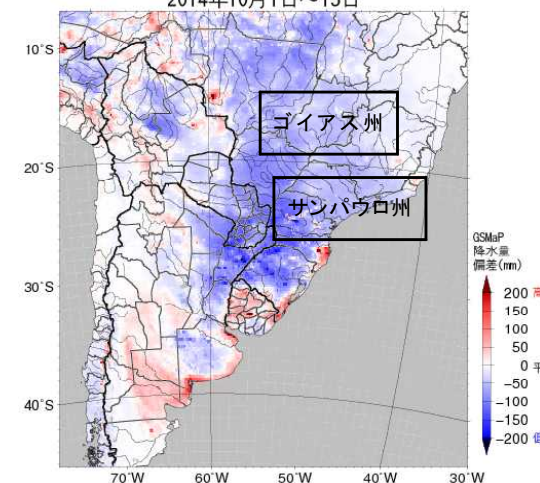
我が国の輸入先国シェア	2位	(2013年数量ベース30.4%)
世界の生産量シェア	3位	(2014/15年度 7.6%)
輸出量シェア	2位	(2014/15年度 17.5%)

表-5 ブラジルのとうもろこし需給
(市場年度：翌年3月～翌々年2月)

(単位:百万トン)					
年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値(CONAB)	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	81.5	79.3	75.0 (77.8)	-	▲ 5.4
消費量	52.5	55.0	56.5 (55.0)	-	2.7
うち飼料用	44.5	46.0	47.5 (…)	-	3.3
輸 出 量	25.0	21.5	20.0 (20.0)	-	▲ 7.0
輸 入 量	0.9	0.8	0.8 (0.3)	-	0.0
期末在庫量	14.2	17.8	17.1 (18.3)	-	▲ 3.9
期末在庫率	18.3%	23.2%	22.3% (24.5%)	-	▲ 0.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.80	15.70	15.00 (15.30)	-	▲ 4.5
単収(t/ha)	5.16	5.05	5.00 (5.08)	-	▲ 1.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」 (10 October 2014)
CONAB 「Acompanhamento da Safra Brasileira de Grãos」 (9 October 2014)

2014年10月1日～15日



資料：JAXA提供の「衛生全球降水マップ(GSMaP)」を農林水産省にて加工
注：青色は平年より降水量が少ないことを表す。

オ EU

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、前年度より増加し、71.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より減少し、75.5百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より増加し、2.5百万トンとなる見込み。

輸入量は、前年度より減少し、7.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量はほぼ前年度並み、期末在庫率もほぼ前年並みの見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、2013/14年度の輸出量で上方修正、期末在庫量で下方修正、2014/15年度の実産量で上方修正、輸入量で下方修正された。結果として、期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

2014/15年度の実産量は71.0百万トンと、前年度(64.2百万トン)を10.6%上回り史上最高となる見込み。作付時期に好天に恵まれた他、2014年7月に降り続いた強雨がEU全土の土壌水分を増加させ、干ばつ等のストレスを受けることなく理想的な生育環境となったため。現在、EU南東部で降雨により収穫作業に遅れが生じているが、作柄への影響はない模様。

【その他】

2014年2月11日、欧州連合(EU)閣僚理事会は、域内での害虫抵抗性GMとうもろこし「パイオニア1507」の栽培を認可する法案を協議した。本法案は、加盟国内でのGM種子の栽培の可否を各国毎に定めることを可能としている。本法案につき、加盟国のうちフランス、ハンガリーなど19カ国が反対を表明したものの、同年6月12日、同理事会にて政治合意に達し、今後、欧州議会の議論を経て、欧州委員会によって承認案が採択される見通しである。

2014年5月5日、フランス議会は、GMとうもろこしの栽培を、環境へのリスクを理由に全面禁止する法案を可決した。同国法案は、EUが将来的に承認するあらゆるGM品種の栽培を禁止するものとなっている。

2014年6月13日、EU閣僚理事会は、輸送燃料における食物由来バイオ燃料の混合比率を7%に制限する法案を可決した。こうした燃料が食料価格の高騰に拍車をかけ、環境面のメリットより悪影響の方が大きいとする批判に対応したものである。今後、加盟国との議論を行い、年末までに結論を得たいとしているが、法案の行方は不透明な状況となっている。

2014年9月20日、EU委員会は、とうもろこしの輸入関税を5.32ユーロ/トンから10.44ユーロ/トンに引き上げる旨を発表した。EUは2010年8月よりとうもろこしの輸入関税を撤廃していたが、国際相場の下落を受け、2014年7月16日に輸入関税を復活させたばかり。

(世界の生産量シェア 4位 (2014/15年度 7.2%))

表-6 EUのとうもろこし需給(市場年度:10月～翌年9月)

(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15		
			予測値、()はEU	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	58.9	64.2	71.0 (71.8)	2.7	10.6
消 費 量	69.6	76.0	75.5 (73.7)	-	▲ 0.7
うち飼料用	53.0	57.5	56.5 (58.8)	-	▲ 1.7
輸 出 量	2.2	2.4	2.5 (2.0)	-	4.2
輸 入 量	11.4	16.0	7.0 (9.0)	▲ 3.0	▲ 56.3
期末在庫量	5.1	6.9	6.9 (20.0)	▲ 0.5	0.3
期末在庫率	7.1%	8.8%	8.8% (26.4%)	▲ 0.7	0.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.72	9.74	9.56 (9.54)	0.05	▲ 1.8
単収(t/ha)	6.06	6.59	7.43 (7.50)	0.24	12.7

資料: USDA [World Agricultural Supply and Demand Estimates]、

[Grain: World Markets and Trade]、

[World Agricultural Production] (11 September 2014)

EU [Balance sheets for cereals, oilseeds and rice] (29 September 2014)

写真-3 仏ボルドー地方(2014年10月8日撮影)
一収穫後、耕起されているとうもろこし畑一



写真提供: Touyeu Yang氏

カ ウクライナ

【需給状況】（詳細は右表を参照）

<米国農務省の見通し>

生産量は、通貨安に伴う資材コストの上昇による単収低下及び晩夏の高湿・乾燥から前年度より減少し、25.0百万トンとなる見込み。

消費量は、前年度より減少し、9.4百万トンとなる見込み。

輸出量は、前年度より減少し、16.0百万トンとなる見込み。

期末在庫量は、前年度より減少し、期末在庫率も7.4%に下落する見込み。

なお、前月からの予測の改訂は、生産量、消費量で下方修正された。結果として、期末在庫量が下方修正された。

【生育進捗状況及び作柄】

米国農務省(USDA)「World Agricultural Production」(2014.10.10)によれば、2014/15年度の実産量は、25.0百万トンと見込まれており史上最高を記録した前年度(30.9百万トン)より19.1%減少する見込み。今年度は、輸入ハイブリッド種子の作付けが前年度より20%増加したものの、2014年7月、とうもろこし主産地である南端部が熱波に見舞われた他、8月には北部及び西部を中心とするとうもろこし産地の広い範囲で高温・乾燥型の天候が続いたこと、現地通貨安を背景に肥料等の輸入資材の調達コストが高んだことから単収が低下した。

2014年10月10日、ウクライナ農業政策・食料省は、東部ドネツク州とルガンスク州では、戦闘の影響が穀物農地に及び、約4.5万ヘクタール分の収穫減になるとの見方を示した。

【貿易情報等】

2014年10月17日、ウクライナ農業政策・食料省は、10月16日現在における2014/15年度の穀物輸出量を10.1百万トン(前年同期7.8百万トン)と発表した。そのうち、とうもろこしの輸出量は0.9百万トン(前年同期1.2百万トン)。

【その他】

報道(2014.10.12)によれば、中国側の要請により、シヴァイカ・ウクライナ農業政策・食料大臣と張在ウクライナ中国大使が、中国向けとうもろこしの輸出及び既存の契約の遂行について会談を行った。2013年11月以降、中国は、未承認のGM種子の混入を理由に米国産とうもろこしの受入れを拒否しており、代わってウクライナからの輸入が急増している。両国は経済関係の深化のため、ウクライナの代表団が中国を訪問することで合意した。

また、現在、ウクライナ産とうもろこし、大豆、大麦については対中輸出における植物検疫に関する議定書に署名済みである。ウクライナ政府によれば、対中輸出の対象となる品目を拡大する意向を有しており、2014年中に小麦となたねの植物検疫議定書の署名を目指している。

報道(2014.7.11)によれば、ドネツク州の緊張状態が悪化した為、同州の油糧種子製油所が操業の停止を発表した。操業再開の見通しは立っていない模様。

我が国の輸入先国シェア	5位	(2013年数量ベース)	4.7%
世界の生産量シェア	5位	(2014/15年度)	2.5%
世界の輸出量シェア	3位	(2014/15年度)	14.0%

表-7 ウクライナのとうもろこし需給

(市場年度:10月～翌年9月)

(単位:百万トン)

年 度	2012/13	2013/14 (見込み)	2014/15			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	20.9	30.9	25.0	(27.5)	▲ 1.0	▲ 19.1
消 費 量	8.1	9.9	9.4	(10.4)	▲ 0.5	▲ 5.1
うち飼料用	6.8	8.5	8.0	(8.3)	▲ 0.5	▲ 5.9
輸 出 量	12.7	20.0	16.0	(17.5)	-	▲ 20.0
輸 入 量	0.0	0.1	0.1	(0.0)	-	0.0
期末在庫量	1.2	2.2	1.9	(2.1)	▲ 0.5	▲ 15.6
期末在庫率	5.7%	7.5%	7.4%	(7.4%)	▲ 1.8	▲ 0.1
(参考)						
収穫面積(百万ha)	4.37	4.83	4.60	(5.00)	-	▲ 4.8
単収(t/ha)	4.79	6.40	5.43	(5.50)	▲ 0.22	▲ 15.2

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「Grain: World Markets and Trade」、
「World Agricultural Production」(10 October 2014)
IGC 「Grain Market Report」(25 September 2014)

写真-4 キエフ近郊のとうもろこし畑 (2014年9月30日撮影)
ー収穫直前のとうもろこしー

